



Topics

二輪自転車の歴史

自転車の起源は筆者が思っていたほど古くはなく200年ほど前です。今回は、サイクルズグループに所属するサイクルロードレースチーム『TeamCyclersSNEL』に関連した、自転車の歴史について紙面の許す範囲でご紹介いたします。

二輪の付いた木馬“ペロシフェール”

自転車の原型と言われているのは、1800年代イギリスで子供玩具の木馬の前後に車輪をつけた“ペロシフェール”という玩具で、大人が地面を足で蹴って走るものでした。しかし、ハンドルが無く方向転換には一度停止する必要があるなど、実用性は限定的であったようです。

ドライジーネの誕生

1817年ドイツ人のカール・フォン・ドライス男爵が発明した「ドライジーネ」は、木製の前後同径の二輪で、前輪を操舵できるハンドルを備え、跨った乗員が足で直接地面を蹴って走るものでした。

1817年6月12日ドライジーネの公開走行では、馬車を上回る速度を示し、更に1カ月後の1817年7月、馬車とレースを行い、馬車の所要時間の1/4(約50 kmを4時間)で走破し完勝した記録が残っており、これが初めて歴史に二輪車が登場し、かつ初の二輪車レースの記録とされています。



1817年の発行物に記載されたドライジーネ

ペダル式自転車の誕生

1861年にはフランスで、ピエール・ミショーらにより前輪にペダルを直結したミショー型ペロシペードが発売され、工業製品として初めて量産される自転車となりました。

1870年頃、英国の発明家ジェームズ・スターレーが速度を追求して前輪を巨大化させたペニー・ファージング型を発売し好評を博しましたが、当時盛んに行われたレースなどスポーツ用に特化したもので、重心が高く転倒時の危険性が大きいので、日常利用には困難な乗り物でした。



ペニー・ファージング型

近代(安全型)自転車の誕生

1879年に英国人ヘンリー・ジョン・ローソンにより後輪をチェーンで駆動する低重心で安定した走行が可能な自転車が考案され、ビシクレット(Bicyclette…二つの小輪)と名付けられ、これが英語の Bicycle の元となりました。

1884年スターレー・アンド・サットン(Starley & Sutton)、ハンバー、マキャモン(McCammon)、BSAなどがビシクレットに改良を加えた自転車を発売しております。



マキャモンによる初期の安全型

1885年にジェームズ・スターレーの甥ジョン・ケンプ・スターレーが「ローバー 安全型自転車(Rover Safety Bicycle)」の販売を開始。前後輪が同じ大きさで、後輪チェーン駆動の現在の自転車に近い姿です。



安全型自転車の一例

しかし、この時までの自転車は車輪が木製か空気なしのゴム製であり、乗り心地は非常に悪く「ボン・シェーカー」(骨ゆすり)とも呼ばれるようなものでしたが、1888年にジョン・ボイド・ダンロップが空気入りタイヤを実用化してから乗り心地と速度が大幅に向上しました。その後フリーホイール機構(ペダルを回し続けなくても惰性で進むような機構)が普及し、自転車の基本がほぼ完成されました。 出典: Wikipedia

Series

好きなもの
(乗り物②車編その2)

東港金属・京浜島工場長 宮越 和光

こんにちは、宮越です。羅針盤も3回目、前回からの続きです。ある日、バイク屋で働いていた友人が「みんなでジェットスキーをしよう!」と言い出しました。当時よくつるんでいた5人でお金を出し合っ

て2人乗りのマリンジェットを買うことに! トランスポーターはその友人が乗っていたハイラックスWキャブで

トレーラーを牽引する事になりました。それぞれ船舶免許を取りに行き、全員4級船舶免許を取得! グレンドは利根大堰という埼玉と群馬の境を流れている利根川を堰き止めている所、休みになると友人たちとBBQ道具を持ってマリン

ジェットを乗りに行っていました。何回か乗りに行き色々覚えてくると、自分で牽引して乗りに行きたいという欲が出てきます。

セリカを売りに出して、自分もハイラックスWキャブを買ってしまいました! リフトアップしてサイズアップしたタイヤを履かせて+オーバーフェンダー、カンガルーバンパーに荷台部分はロールバー、バンパーに2灯、ロールバーに4灯の無駄に明るいフォグランプを計6灯装着! この車でどこ走るの? ってぐらいカスタムを施しました。

もちろん、トレーラーが牽引出来るようにヒッチボールも取り付け、自分の車でも牽引して乗りに行けるようになりました。

タンデムのマリンジェットも乗り慣れてくると、今度はスタンドアップのマリンジェットも乗ってみたいくなります、元バイク乗りなので自然な流れなのか!? スタンドアップも手に入れます。

荷台にスタンドアップを載せて、タンデムをトレーラーで牽引して、遠くは猪苗代湖や九十九里浜、荒川のマリーナから降ろして、お台場~羽田沖まで20台程でツーリングに行ったりと楽しみが広がりました!

ハイラックスは今まで所有してきた車の中ではダントツに楽しい車でした。しかし、、当時出来たディーゼル規制で、地元埼玉では車検が取れなくなり泣く泣く手放しました。数年前に新型のハイラックスが発売されて、これは! と思い家族に

言ってみた所、即NGの回答。ですよ、トラックですから。現在はヤリスクロスというトヨタの小型SUVでカーライフは満喫しています。

ハイラックスは4WDという事もあり、夏はマリンスポーツ冬はウインタースポーツにと活躍していました。

当時、スキーからスノーボードなるものが流行り始めた時で、流行り物好きとしてはすぐに飛びつきました。しかし、スキーヤーからは煙たがられて、スノボがOKなスキー場も少ない中でも滑りに行っていました。

次回横乗りスポーツの話に続けていきたいと思えます。



Cyclers Topics!

機械稼働の見える化で工場・設備の課題解決を図る インターコム「Cycle View」



サイクルズグループ 株式会社インターコムが提供する、工場設備の“今”を可視化するDXへの入り口「Cycle View」のご紹介です。DX(デジタルトランスフォーメーション)とはデジタル技術を活用して、業務やビジネスモデルを変革し、事業を進化させる取り組み。その手順は、現状分析 → 課題特定 → デジタル導入 → 業務改革 → 検証 となっており、「Cycle View」は現状分析ステップで工場や設備の「今」を数値化し可視化します。まさにDXへの入口となります。工場内で稼働している設備の電流・温度・振動などのデータをリアルタイムで取得し、AWS上で即座に可視化。必要な情報をどこからでも、瞬時に確認できます。このデータを解析することで現場の課題を特定し、DXへの伴走もインターコムでご提案します。グループの東港金属では、京浜島工場の破碎機に設置。電流の変化をパトライトで可視化するとともに、オペレーターの手元のスマートホン端末でも確認しながら破碎機への投入量を調整し、機械負担を軽減し安定稼働を図れるようになりました。まずは機械稼働の可視化から進めてみませんか?